

なにわのみやあと
難波宮跡発掘調査(NW10-6次)

現地公開資料

2011年1月22日(土)

大阪市教育委員会・財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館

■発掘の経緯

難波宮跡ではこれまで、飛鳥時代に孝徳天皇によって建てられたとされる前期難波宮と、奈良時代に聖武天皇によって再建された後期難波宮の二つの時期の宮殿跡が見つかっています。

今回の調査は平成22年度難波宮跡整備事業の一環として行っています。調査地は難波宮跡公園の東側で、前期難波宮の朝堂院をめぐる回廊や、後期難波宮大極殿院の東側にあたります。政治や儀式の場として重要な朝堂院、大極殿院の外側ですが、これまで奈良時代の瓦の堆積、飛鳥時代の柱跡などの遺構が見つかってきました。また昨年度には奈良時代の建物基壇とみられる高まりが検出され、大極殿院東側で見つかった奈良時代の遺構群について、孝謙天皇が難波へ行幸の際に使用した東南新宮であった可能性も指摘されています。

今回の調査地から約5m北で行った昨年度の調査では、後期難波宮の時期の高さ25cm以上の建物基壇とみられる高まりが残っていました。基壇の北辺と東辺は確定できたのですが、南辺は調査範囲の外で、西辺についても中世の耕作によって上部がかなり削られていたため輪郭が不鮮明でした。今回、この基壇の南辺を確定し、西辺の状況を明らかにすることを目的に調査の場所を設定しました。

■調査の成果

調査地のうち、かなりの部分が既存建物の基礎によって破壊されていました。しかし、前期難波宮を造営する時に谷を埋めて平坦面を造成した整地層、前期難波宮の時期の柱穴、後期難波宮の建物基壇とみられる高まりを検出することができました。

このうち、建物基壇とみられる高まりは黄褐色の土を盛ったもので高さ約25cm分が残っており、この盛土の中には小石や凝灰岩の破片が多く含まれていました。盛土は厚さ約10cmの地層を何層か積み上げていましたが、版築の痕跡は見られませんでした。高まりの周辺には、瓦や小石などが多く散乱していました。瓦には後期難波宮の特徴である重圏文の軒瓦も含まれており、建物に使われていたものが、建物解体時に散乱したものと考えられます。

また、調査区の西半には後期難波宮の盛土を行う前に東西方向の溝が掘られていました。溝内には水が流れた痕跡は無く、基壇を積み上げる時に埋っていたので、基壇構築直前に行われた何らかの地業(整地)の痕跡の可能性もあります。今回の調査は、建物基壇とみられる盛土の構築状況(重なり)を明らかにできたことが大きな成果と言えます。

■残された問題

今回見つかった盛土は昨年度の調査で見つかった基壇盛土と類似しており、一連の建物基壇と考えることは可能でしょう。しかし、基壇の西辺が予想された場所から検出できなかったこと、また、想定された西辺よりさらに西側に、盛土や瓦の堆積が広がっていたことなどから、異なる構造物に伴う盛土である可能性もあります。

また、盛土を凝灰岩の化粧石で外装していたかどうかも現在のところ不明です。難波宮の多くの場所での知見から、凝灰岩などの石材は長岡宮の造営などのために持ち去られたと考えられています。しかし、今回の調査地では、基壇の地覆石を据え付けるために掘られたであろう溝を確認することはできませんでした。

今後、これらの課題を発掘調査によって明らかにしていきたいと考えています。

用語解説

[難波宮]

上町台地北端(中央区法円坂一帯)に位置する宮殿で、昭和29年(1954)から始まった発掘調査によって明らかになった。飛鳥時代と奈良時代の二時期があり、飛鳥時代の宮殿を「前期難波宮」、奈良時代の宮殿を「後期難波宮」と呼んでいる。難波宮跡は昭和37年(1962)に後期難波宮大極殿一帯の17,500㎡が国指定史跡になり、以後数度の追加指定を経て、現在の史跡指定範囲は大阪歴史博物館南側の広場を含め、約13万㎡に及ぶ。

前期難波宮は、飛鳥時代の孝徳天皇(在位:645~654年)によって造営された「難波長柄豊碕宮」であると考えられている。蘇我氏を滅ぼした乙巳の変(645年)ののちに飛鳥から遷都され、白雉元年(650)から造営が始まり、2年後に宮殿が完成したと『日本書紀』に記される。国内最初の本格的宮殿で、内裏前殿の両側には八角形の楼閣風建物がそびえ、14棟以上の朝堂、宮城南門(朱雀門)などを有する。建物はすべて掘立柱建物で、瓦は使われていない。孝徳天皇が亡くなる直前に政治の中心は再び飛鳥に戻され、その後、天武天皇(在位:673~686年)の時代には副都として整備されるが、朱鳥元年(686)の火災によって焼失してしまった。

後期難波宮は、奈良時代の神亀3年(726)に聖武天皇(在位:724~749年)によって前期難波宮と同じ場所に造られた。中心部は大極殿や8棟の朝堂、内裏などで構成される。このうち政務や儀式が行われた大極殿・朝堂は礎石建物で瓦葺屋根が採用されたが、天皇の居住空間である内裏は従来からの掘立柱建物で瓦を使用していない。天平16年(744)に一時的に首都になるが、翌年には平城京に再び都が遷され、以後は副都として機能した。延暦3年(784)の長岡宮造営のために宮殿の建物が解体されて、移築された。これによって難波宮は終焉する。

[礎石建物]

基壇あるいは地面の上に据え置いた礎石の上に柱を立て、上屋を組んだ建物。掘立柱に比べて建物が沈下しにくいとされている。屋根は瓦葺きであることが多く、後期難波宮でも大極殿や朝堂院などの礎石建物に瓦葺き屋根が採用されている。

[東南新宮]

『続日本紀』天平勝寶八年(756)二月の記事に出てくる宮室。天平勝寶八年二月二四日、孝謙天皇は聖武太上皇とともに難波に行幸する。途中、智識寺とその周辺の5寺を礼拝したのち、2月28日難波に到着。『続日本紀』には「是の日、行、難波宮に至り東南新宮に御す」とある。その後、難波には4月15日まで滞在しており、この間、東南新宮が使用されたと考えられる。その名称から「東南方向にある新たな宮」と考えられ、当時まだ存在していた後期難波宮内裏の東南方向が候補地となる。今回の調査地周辺はまさに「東南」の地であり、調査地周辺を東南新宮の候補地と考える説も出ている。

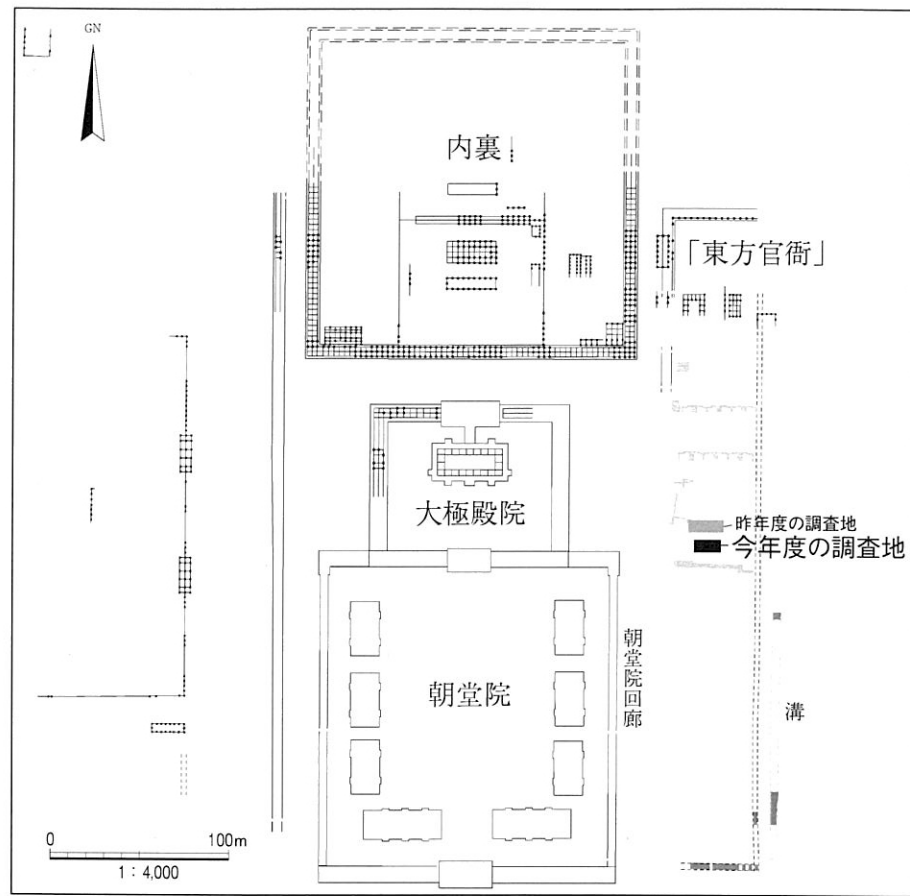
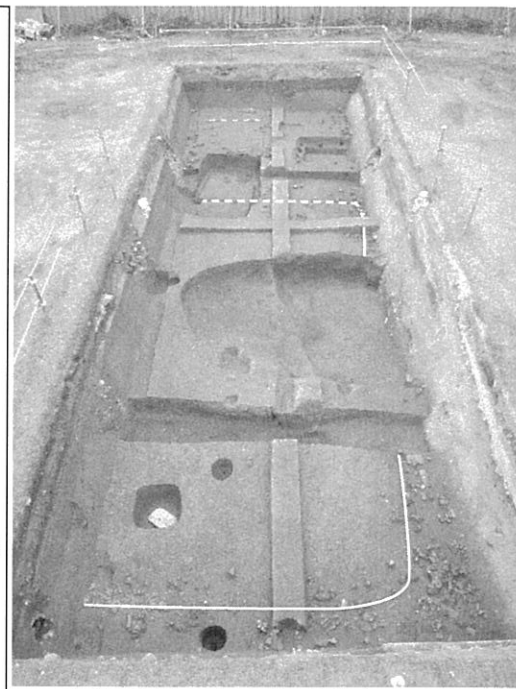
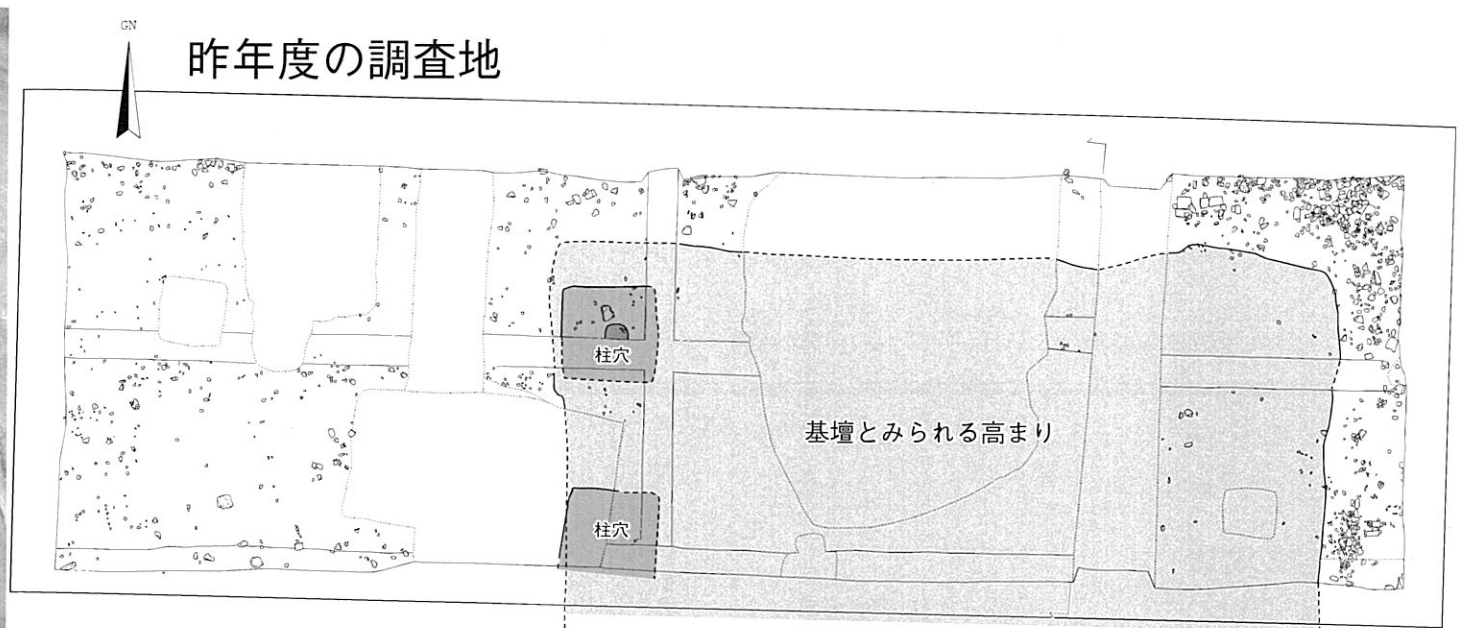


図1 後期難波宮と今回の調査地



昨年度見つかった基壇とみられる高まり(東から)



未調査区

今年度の調査地

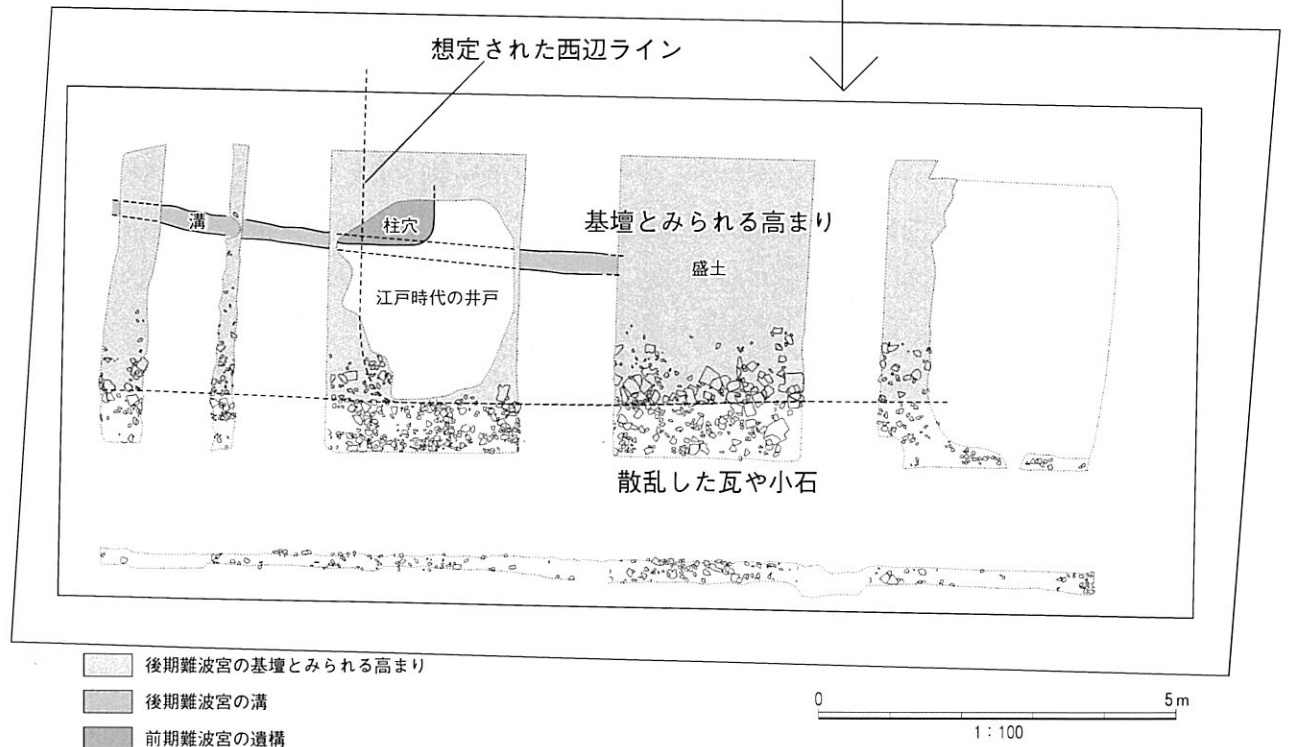


図3 調査の成果

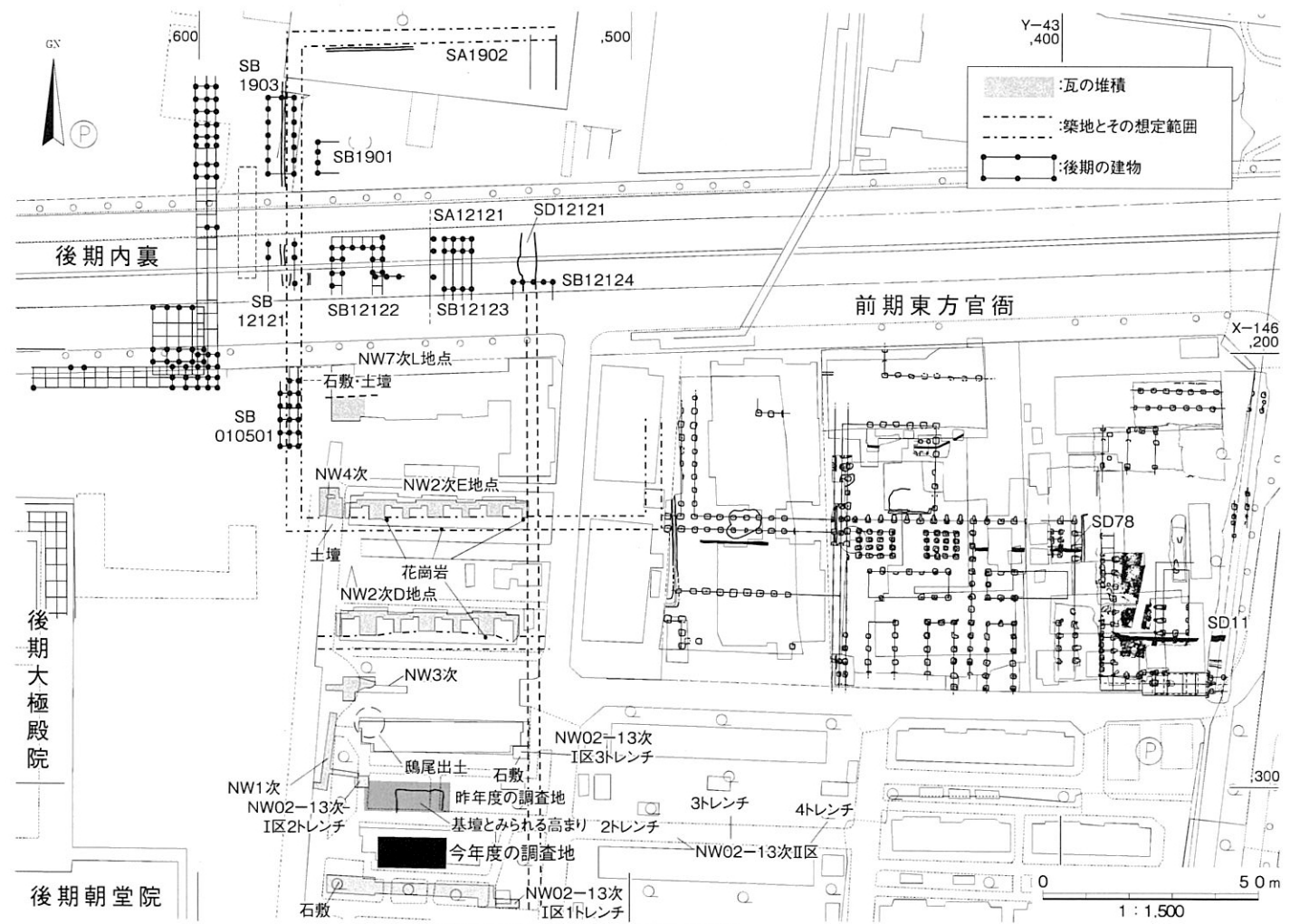


図2 これまでの調査成果

*NWは難波宮跡の調査記号。SBは建物、SDは溝、SAは柵